

# そっち見てよ

Fumio Kusanagi

2016 10.30

お星様ってお話しするの知ってる？知ってるよ。レイカとコウジは話していました。レイカは魔法の棒を持ってコウジに空を飛べと魔法をかけていました。コウジはぴょんぴょん跳ねていました。僕はお星様みたいになれるかな。レイカは思いました。「お星様って何してるの？」「きっと、パパみたいになりたいんだ」「パパ？パパなのかお星様って」「美味しのか？お星様って」「美味しそう」「食べに行こうよ」二人はお星様を食べに空を飛んだ。そしたら雲が話しかけてきた。「どこに行くんだい？」「お星様を食べるの」雲は言った「じゃあ、僕も食べてもらいたいな」「えー雲は嫌だ」「なんでなの？」「スーツとしてるから、ガムみたいだから」「ガム嫌い」「僕はみかんの味だよ」「みかんって何よ？」「丸くて黄色いしょっぱいフルーツだよ」「しょぱいがわかんないよ」「しょっぱいってのは、きりって感じだよ」「何よ、きりって」「だからお前は食べたくないって言ったんだ」雲は仕方なく仲間の雨を連れてきた「僕が雨だよ」「雨？」「アメ」「そう僕が雨」「僕なら食べてくれるかい？」「食べる、アメは美味しいからね」「どんなアメなの」「りんごの味だよ」「りんごかあ」二人は雨を食べた。「美味しい、アメは最高だ」「沢山、アメをもらったから、木を見つけたからそこで木登りをしながら食べていた。そしたら木が話し始めた。「僕は何かわかるかい？」「木でしょ。それくらいわかるわよ」「木は何の為にいるんだい？」「君たちが吸ってる空気を作っているんだよ」「空気？」「空気って何？」「空気って目の前にある見えない物の事だよ」「何で見えないの？」「見えないようにできてるんだ」「空気は食べると味がしないんだね」「空気食べたい」「空気は何味なの？」「空気はバナナの味がするよ」「バナナか」「じゃあ空気ちょうだい、お腹すいたし」空気が現れた「空気だよ」「僕はすでに食べているじゃない、バナナの味するかい？」「食べてなんかないよ」「君を食べたいんだ」「美味しいと思う？バナナの味だよ」「バナナはゾウさんが好きなの」「ゾウさんはパオーってやって雨が降るんだよ」「それもね、僕を食べて、バナナ食べて、育つんだよ」「えーすごい」「空気ってすごいね、何で見えないの？」「それはね木から産まれて、吸われる為にあるからだよ」「見えたら、いいね」「バナナだから黄色になればいい、そしたら見えるね」「僕も見えるようになりたい、だから、食べて」「うん」二人は空気を食べた。「なんか味しくない？」「まずい、これバナナじゃないよ」「空気がバナナって言っていたじゃない」「うーん、なんか怖いね」「ママ言っていたわ、変な物はお腹痛くなるって」「お腹痛くないよ」「私も、って事は大丈夫って事よ」「うん」「空気はまずい」二人はアメを食べてテンション高めに『星食べたいー』と空を飛んだ。

## お願い

---

アメを舐めながら空を飛んでいたら、一緒に沢山の星たちと空を飛んだ。「わー」まるでイルカのように宇宙が海のように一緒に流れた。そうしたら、うさぎが現れた。「あなた、何！」「うわ、なんだこれ」「うさぎだよ」「うさぎ？」「うさぎっていうの？」「そう、うさぎ、僕月に住んでいるんだ、ここは月だよ」「ここが月かぁ」「わーい、うさぎ！星食べたら、ママのところまで帰しなさい」「うん、わかった」星たちが集まり出した。「きゃー、星見つけた」「なんか海で見た感じの、アレに似てる」「僕たちに願いはあるかい？僕たちを食べると願いが叶うよ」「ほんとー」「やったー」「私はお花屋さんになりたい」「僕はスーパーヒーロー」「わかったよ」「あなたは何味なの？」「いちご味だよ」「さっき空気は味しなかったんだけど何でなの？」「空気は味はないんだよ。味がないから嘘ついたの」「雨は味がした」「空気って何だか不思議ね」「君は本当にいちご味なの？」「私もいちご味はあんまりだなー風邪薬のいちごまずいもん」「何でいちご味なんだよ、オレンジが良かったのに」「私もオレンジが良かった」「実はねイチゴ味じゃないんだ、宇宙の味だよ。大人だから、フルーツの味に変えたの、君たちもいつかは大人に僕たちみたいになるんだ、イチゴと宇宙どっちを取りますか？」「パパやママみたいにか、しかし、宇宙はわからない、、、」「私は宇宙がいい」レイカ言った。コウジもつられて「僕も宇宙だ」「それでは決まったね。」星たちは二人の口の中にいっせいに入って言った。

## 帰り道

---

二人は月で眠っていた。「コウジ、コウジ」「んっ」うさぎが言った「起きたかね、そろそろ地球に戻らないとね」「そうだね」「夕飯が待っている」「では行きましょう」うさぎは引力で二人を地球へと引っ張った。宇宙全体がうさぎを先頭に地球にパワーが落ちた瞬間だった。そして二人に宇宙の力が備わった。地球に着くとうさぎは月へと戻れなくなり、二人の付き人となった。美味しいママの料理楽しみにしていると後悔はしていないようだった。だが、たどり着いた所が家から全く逆のところだった。二人は泣いた。「パパに会いたい、ママに会いたい。」フラフラと歩いていたら馬が現れた「どーしたんだい？」「宇宙から帰ってきて、パパとママの所に帰りたいんです。「わかった、連れて行ってあげるよ」馬は光った、そして二人を引力で真下に引っ張って行った。一瞬で自宅までたどり着いた。

「んー？」なんかおかしいな夢見たなー。ママが起こしにきた「ご飯よ、早くしなさい、幼稚園遅れるわよ」

「今日ね、宇宙の夢見たんだー」「宇宙で何したの？」「宇宙でみかんの飴玉なめたの」「美味しかった？」

「うん、あとね、男の子いた」「レイカの好きなカイト君じゃないの？」「多分そう、今日もカイト君と縄跳びするの」「何回できるようになった？」「10回よ」「お友達のアイリちゃんとも仲良くするのよ」「ほーい」今日はわたあめを先生と作ってみようという企画だった。わたあめは美味しくなんだか浮いたような気がした。そしたらコウジ君が現れた「おっレイカ」「コウジ、わたあめ食べた？」「食べたよ、ちょーうまかった」「うさぎさんがアメくれて食べた夢見たんだ」「僕もだよ、一緒に夢見た気がした、僕の夢にレイカが出ていた」「私の夢はカイト君だったよ」「多分俺だよ、カイトじゃない」「月のうさぎ、ここにいる」「きゃ！？」二人はわたあめを食べながら昨日の宇宙の旅について話し合った。星を食べたら夢が叶うということには全く気がつかなかったが、どーやって宇宙に行ったのか？、そして、なぜ宇宙に行ったのか？なぜ僕とレイカだったのか？よくわからないが僕はレイカが大好きな事は間違いない。

## グッバイ

---

僕はレイカに告白した。「大好きです」レイカは言った「私、好きな人いるの」「そっか、でもね、きっと僕と結婚するよ」「私の夢、壊さないでよ」「レイカの夢、お花屋さんだろ？」「なんで知ってるの？」「僕はスーパーヒーローだ、星食べると夢叶うってのを僕は信じているんだ」「また、その話？、絶対夢よ、確かにその一緒の夢っぽいけど、同じ夢を見るなんてありえないわ」「じゃあ、なぜ僕らの瞳は星になっているんだ？」ほかの友達丸くて黒、僕らは目が星そして空を飛べる」レイカも飛べるんだよ。レイカは念じた「きゃ！？ほんとだ飛べる！」そしてうさぎも付いてきた。「言っただろ、俺はレイカが大好きだって」。